

家族とのつながりを強める 「私の分身『ひろちゃん』ワークショップ」の提案

住岡英信^{†1} 大和信夫^{†2} 塩見昌裕^{†1}

概要：本研究では、遠く離れた親族、特に祖父母との社会的つながりを強めるための取り組みとして、児童が自分の分身ロボットを制作し、それを親族に送る「私の分身ひろちゃんワークショップ」を提案する。実際に学童保育施設に通う小学校低学年の生徒に対してワークショップを行った結果、保護者や参加した生徒からはポジティブな反応が見られた。ロボットを送られた親族に対する調査など、ワークショップがもたらす効果検討についての今後の計画についても述べる。

1. はじめに

近年、核家族化が進み、高齢者の社会的孤立が問題となっている。この流れは、世界的な新型コロナの蔓延とその感染防止対策により急速に進み、政府が内閣官房に孤独・孤立対策担当室を設置し、重点的に対策を行うまでになっている。このような問題に対し、急速に普及した遠隔コミュニケーションツールの利活用が進められている。しかし、そういったツールでは視聴覚情報の呈示のみであり、実際に相手と対面した際に感じられる安心感や触れ合いを実現するまでには至っていない。

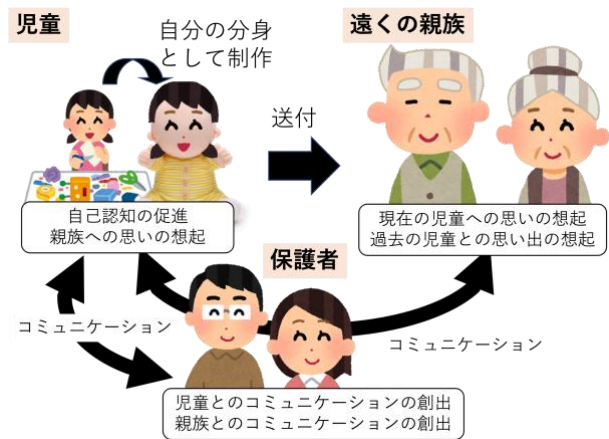
我々はこれまで、高齢者へのメンタルサポートの取り組みとして、赤ちゃん型対話ロボット「ひろちゃん」（製品名「かまって『ひろちゃん』」（ヴイストーン株式会社）を開発し（図1）、認知症高齢者が、積極的に関わること[1]。1ヶ月に渡る長期的な導入においても認知症高齢者に飽きずに使い続けてくれることを確認してきた[2]。

ひろちゃんは顔がなく、見た目からは性別や個性を感じられない存在である。利用者の想像を引き出し、好きな顔を想像してもらうためにこのようなデザインを採用したが、高齢者施設で行ったこれまでの実験の中で、利用者の中には介護者とともに自身の好きな顔をデザインし、愛用することが報告された[2]。すなわち、ひろちゃんの顔をそれぞれの高齢者が望む顔、例えば彼らの孫の顔にすることで、その存在を身近に感じ、社会的なつながりを強く感じることができると考えられる。

そこで、我々は子どもたちにひろちゃんに自分の顔をデザインした「私の分身ひろちゃん」を制作してもらい、それを遠く離れた祖父母や親族に送るというワークショップを企画した。本論文では、本ワークショップについての詳細を報告しつつ、その意義や社会的受容性について議論する。



図1 かまって「ひろちゃん」



2. 私の分身ひろちゃんワークショップ

2.1 ねらい

私の分身ひろちゃんワークショップでは、参加した児童、その保護者、遠く離れた親族（主に児童にとっての祖父母）の3者それぞれに対して、図2に示すような効果を狙っている。児童に対しては、鏡や写真で自分自身の顔や自分の幼い頃の顔を確認することで、自己の認知に対する気づき

^{†1} 国際電気通信基礎技術研究所

^{†2} 北陸先端科学技術大学院大学

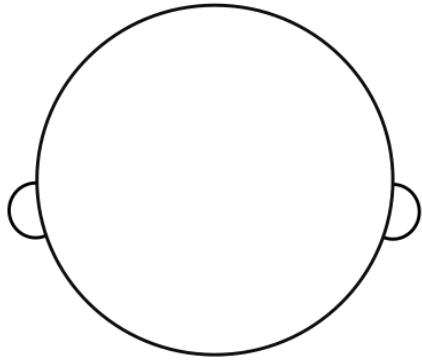


図 4 自分の顔をデザインするために利用した
原寸大のひろちゃん頭部



図 3 実際に生徒が制作した「私の分身ひろちゃん」(写真提供：社会福祉法人隆生福祉会&グローバルウィング)

を与えること、そして自分の親族に向けて自分の顔をデザインしたひろちゃんを制作することで、親族への思いを馳せる機会を作ることを狙った。その保護者に対しては、児童が私の分身ひろちゃんについて話すことで、家庭内でのコミュニケーション機会を増やすことに加え、ひろちゃん送付による遠くの親族とのコミュニケーション機会の創出を狙った。最後に遠く離れた親族においては、児童自らが制作した児童の分身ひろちゃんを受け取り、それをあやすことで、現在の児童に対する思いや、これまでの児童との思い出を想起させ、児童をより近い存在に感じるとともに、ひろちゃんをきっかけにして、児童やその保護者とのコミュニケーションの機会を創出できるのではないかと考えた。

2.2 ワークショップ詳細

ワークショップは学童保育施設「グローバルウィング」で行われた。事前に施設の先生から、施設を利用している1年生～3年生の生徒とその保護者に対して、ワークショップについての趣旨を説明していただき、同意いただいた生徒約40名が参加した。保護者の多くは、その意義に賛同していただけ、ほとんど全ての生徒に参加してもらうことができた。

生徒にはワークショップの前に、事前に鏡で自分の顔を観察しながら、原寸大のひろちゃん頭部をプリントした紙(図3)に自分自身の顔をデザインすることを考えてもらった。ワークショップでは、生徒たちにフェルト(茶色・黒・白・濃いピンク・薄いピンク・赤)を渡し、自分のデザイン画を元に、好きなフェルトを切って顔パーツをつかっていった。生徒達のフェルトの切り方には1)事前に行ったデザインを見ながら下書きなく直接切るグループ、2)書いたデザイン画をハサミでカットし、それをフェルトに貼って型通りに切るグループ、3)フェルトにカットしたい形状をチャコールペンで書き、それをカットするグループがいた。その後、実際にひろちゃんの頭部に顔パーツのをせてその配置を確認し、フェルト用ボンドを用いて、パーツを貼り付けていった。ほとんどの生徒が40～50分で制作を完了した。1年生の何人かは、フェルトの切り貼りについて難しいところがあったが、早く終わった3年生が補助をするなど、協力して制作する場面も見られた。また、生徒はひろちゃんと同封するメッセージも作成した。最終的に38名が私の分身ひろちゃんが制作された。多くは自身の祖父母へ送られたが、約3名程度、自身の兄弟姉妹や両親へプレゼントした。ワークショップ中、生徒たちからは「楽しかった」などポジティブな反応が多く見られた。親族の反応については、現在調査中である。

3. おわりに

本研究では、遠く離れた高齢者との社会的つながりを高めるために、その孫に自分の顔をデザインしたひろちゃんである「私の分身ひろちゃん」を制作してもらう「私の分身ひろちゃんワークショップ」を提案した。今後は、実際に参加した生徒やその保護者、ひろちゃんを受け取った親族からの印象について連携機関とともに調査することを検討している。また、ワークショップを行ったスタッフからの聞き取りを行うことで、本ワークショップの効果について全ての関係者を対象にした調査を行う予定である。

謝辞 本研究はJST, CREST, JPMJCR18A1の支援を受けたものです。研究にご協力いただいた社会福祉法人隆生福祉会およびアフタースクール「グローバルウィング」のスタッフの皆様、生徒の皆様およびそのご家族に感謝いたします。

参考文献

- [1] Sumioka, H., Yamato, N., Shiomi, M., and Ishiguro, H. "A minimal design of a human infant presence: a case study toward interactive doll therapy for older adults with dementia." *Front. Robot. AI* 8. 2021 doi:10.3389/frobt.2021.633378.
- [2] 大和信夫、住岡英信、石黒浩、神田陽治、塩見昌裕、"認知症高齢者向け赤ちゃん型対話ロボット-介護施設での長期導入の実現-"、*トランザクションデジタルプラクティス*, Vol.3 No.4, Oct. 2022